

## 祖堂集卷第四

石頭和尚、吉州思和尚に嗣ぐ。南嶽に在り。師諱は希遷、姓は陳、端州高要の人なり。在孕の時、母は糞穢を絶ち、誕に及ぶの夕、満室の光明あり。父母は恠異し、巫祝に詢えり。巫祝曰く、斯れ吉祥の徴なり、と。

風骨端秀にして方頤大耳、専ら静にして雑らず、凡童に異なれり。年哺めて醜戯に及びて、將て仏寺に詣り、尊像を見る。母氏は礼せしむ。礼し已つて曰く、斯れ仏なり、と。師も礼し訖つて瞻望すること之を久しうして曰く、此れ蓋し人なり。形儀手足、人と奚ぞ異ならん。苟しくも此は是れ仏ならば、余も当に焉と作るべし、と。時の道俗は咸な斯の言を異とせり。親黨の内多く淫祀を尚び、率ね皆な宰犠して以て福祐を祈る。童子は輒ち林社に往きて、其の祀具を毀ち牛を奪いて還る。歳の数十に盈ちて悉く之を寺に巡らせり。是れより親族は益す浄業を修めたり。時に六祖正に眞教を揚ぐ。師は世業新州に隣接す。遂に往きて礼覲す。六祖は一見して欣然たり。再三頂を撫して之に謂いて曰く、子は当に吾が眞法を紹ぐべし、と。之が与に饌を置き、勸めて出家せしむ。是に於いて落髮して俗を離る。開元十六年、羅浮山に具戒せり。略ぼ律部を探り、得失紛然たるを見て乃ち曰く、自性清浄、之を戒体と謂う。諸仏は無作、何の有か生ぜん。池れより小節に拘せず、文字を尚ばず。

肇公の涅槃無明論に、万象を覽て以て己と成す者は其れ唯だ聖人のみなるか、と云うを読むに因りて、乃ち歎じて曰く、聖人は己無くして己ならざる所摩し。法身は無量、誰か自他を云わん。円鏡は虚しく其の間を鑑して、万象は躰玄にして自ら現ず。境智は眞に一、孰か去來を為さん。至れるかな斯の語や。

尚お山舎に於いて仮寐し、夢に吾が身の六祖と同じく一亀に乗りて、深池の内に游泳するを見たるが如し。覺して詳かにして曰く、龜は是れ靈智なり、池は性海なり。吾は師と同じく靈智に乗り、性海に遊ぶこと久し、と。

六祖遷化せし時、師問う、百年後、某甲は何摩人にか依らん。六祖曰く、思を尋ね去れ。

六祖遷化せし後、便ち清涼山靖居の行思和尚の処に去き、礼拝して侍立す。和尚便ち問う、何摩処より来るや。對えて曰く、曹溪より来り。和尚は何痒子を拈起して曰く、彼中に還た這个有りや。對えて曰く、但だ彼中のみ非ず、西天にも亦た無し。和尚曰く、棄は応に西天に到れるなるべし。對えて曰く、若し到らば即ち有らん。和尚曰く、未在、更に道え。和尚も也た須らく一半を道取すべし。何摩と為てか独り專甲をのみ考する。和尚曰く、棄に向つて道つを辞せざるも、已後人の承当すること無からん。

・專甲 某甲に同じ。

和尚又た問う、棄は曹溪に到りて、个の何摩物をか得来る。對えて曰く、未だ曹溪に到らず、亦た曾つて失わず。師却つて問う、和尚は曹溪に在りし時、還た和尚を識せるや。思曰く、棄は只今吾を識すや。對えて曰く、識するも又た争でか能く識得せん。

又た問う、和尚は嶺南より出でし後、此間に在ること多少(原作小)の時ぞ。思曰く、我も亦た汝の早晚曹溪を離れしかを知らず。對えて曰く、某甲は曹溪より来たらす。思曰く、我も也た棄が来処を知れり。對えて曰く、和尚は幸いに是れ大人、造次なること莫れ。

・早晚 いつどの時。

・造次 いいかげんな。

思和尚は師の常人に異なることを見て、便ち西侠に安排し、日夕に只だ和尚の身边に在らしめたり。其の師は形陣は端正にして、人の是非するに足り、直に和尚の耳裏に到ることを得たり。和尚は消息を得て、師に向つて曰く、汝正時是。師便ち応接す。

第二日、粥鼓鳴り了るや、西侠裏に在りて坐し、手を伸ばして粥を取る。厨下の僧、其の鉢盂を見て尋ね来たるに元来其の和尚の粥を取るなり。衆人は、是れ其の人の安排せられ、凡夫にして聖人を識らず、和尚を謗り又た師を毀つことを知れり。闍院一齊に上来し、和尚の前に於いて収過せり。思和尚は師に向つて曰く、今より已後、第一に此の事を行ずるを得ず。棄若し此の事を行ずれば、是れ棄、正眼埋却するも也た難からず。

・西侠 僧堂内の職位であるつが不詳。

・汝正時は 読めない。

・収過 あやまちを詫びる。

・第一不得 第一は禁止の意味を強める。

師の受戒せし後、思和尚問う、棄は已に是れ受戒し了れり。還た律を聴くや。對えて曰く、律を聴くを用いず。思曰く、還た戒を念ずるや。對えて曰く、亦た戒を念ずるを用いず。思曰く、棄は讓和尚の処に去きて書を達せよ。得たりや。對えて曰く、得たり。思曰く、速やかに去きて速に來たれ。棄若し遅晩すること嫡子ならば、吾を見ざらん。棄若し吾を見ざれば、牀下の大斧を得ざらん。師は便ち去きて南嶽讓和尚の処に到り、書は猶お未だ達せず、先ず礼拝して問う、諸聖をも慕わず、己靈をも重んぜざる時は如何ん。讓和尚曰く、子の問いは太高生。向後、人は闡提と成り去らん。師對えて曰く、寧ろ永劫に沈淪す可きも、終に諸聖に求めて出離せじ。師は機は既に投ぜず、書も亦た達せず、便ち師の処に歸れり。思和尚問う、彼中に信有りや。師對えて曰く、彼中に信無し。思曰く、廻報有りや。對えて曰く、信は既に通ぜず、書も亦た達せず。

師却つて問う、専甲の去きし時、和尚に言有りて、速やかに來たらしめ、牀下の大斧を収取せしめんとせり。今已に來たれり、便ち大斧を請わん。思和尚良久す。師は礼を作して退けり。

斯れの要旨は豈に劣器の能く持せんや。乃ち仏徑ちに心燈を燭し、祖祖玄に法印を伝う。大師は既に投針して久しく丈室に親しみ、膈に望んで春かに方外の機を承くれば、則ち能事は將に備らんとし、道は行わる可し。

思和尚曰く、吾の法門は先聖より展転して遞相伝授す。断絶せしむること莫れ。祖師預め汝を記せり。汝は当に保持すべし。善く自ら好く去れ。久しきに非ざるの間にして、思和尚は遷化せり。

師は麻を着くること一切しり、天室の初に於いて方に衡嶽に届けり。遍く岑壑を探り、遂に南台寺に頓息す。東に石の台の如き有り、乃ち其の上に庵す。時人は石頭和尚と号せり。此の台は則ち梁海禪師得道の台なり。

・ 牀下の大斧 思和尚の仏法。

・ 好去 去つて行く人に対する挨拶。

師の初めて南台に至るや、師僧ぶ去きて看、転じ来たつて讓和尚に向つて説く、昨来、和尚の処に到りて仏法を問ひし、輕忽底の後生来たり、東の石頭上に坐せり。讓曰く、実なりや。對えて曰く、実なり。讓は便ち侍者を喚んで曰く、棄は東辺に去き、子細に石頭上に坐する底の僧を看よ。若し是れ昨来底の後生ならば、便ち他かれを喚べ。若し応ずる有らば棄便ち道え、石上の躡與子、此処に移して裁つるに堪う、と。侍者は此の偈を持って師に拳似す。師答えて曰く、任まかし棄あり声哀しきも、終に山を過ぎて来たらず、と。侍者却来して讓和尚に拳似す。和尚云く、この阿師は、他後子孫の天下人の口を噤却し去らん、と。

・ 躡與 自分の壮健さをほこること。

又た侍者をして法を問わしむ。侍者は彼に去きて問う、如何なるか是れ解脱。師曰く、阿誰か汝を縛せる。如何なるか是れ淨土。師曰く、阿誰か汝を垢せる。如何なるか是れ涅槃。師曰く、誰か生死を將つて汝に与えき。侍者却来して和尚に拳似す。和尚は便ち合掌して頂戴す。

此の時、堅固禪師、蘭、讓三人有り、世宗の匠と為る。僉な曰く、彼の石頭上に眞の師子吼有り、と。

師は主事を喚び、具さに前事を陳ぶ。主事曰く、乞う師、事有らば処分せよ。和尚は衆を領して東辺に去きて石頭を見る。石頭は又た強いて為し得ず、起ち来たつて迎接す。相看一切し了つて、讓和尚は石頭の与に院を起こして成持せり。

・冒頭の師は讓和尚を指す。

・処分 言いつける。

・成持 計らつてやる。もり立ててやる。

僧問つ、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、露柱に問取し去れ。僧曰く、会せず。師曰く、我は更に会せず。

僧が問つ、どういつのが祖師西来意でしょうか。師が云つ、露柱に問いに行け。僧が云つ、分かりません。師が云つ、わしはもつと分からん。

・露柱 夜間照明の灯笼を掛ける柱。知覚・情識を完全に絶したものの象徴。

大顛問つ、古人道つ、有と道い無と道つは二誘なりと。請う師の除かんことを。師曰く、正に無一物、个の什摩をか除かん。師は大顛に索めて曰く、杰喉毛吻を併却して、速やかに道い將ち来たれ。对えて曰く、這個無し。師曰く、若し与摩ならば則ち棄は入門することを得たり。

・併却 ふさいでしまつ。

僧問う、如何なるか是れ本来の事。師曰く、汝は何に因りて我より覓むるや。進んで曰く、師より覓めざれば、如何にして即ち得るや。師曰く、何ぞ曾つて失却したる那作摩なそも。

僧が問う、どのようなのが本来の事でしょうか。師が云う、お前はなぜわしに求めるのだ。進んで云う、師に求めないとするとどうしたらいいんですか。師が云う、いつ失くしてしまったというんだ。

・那作摩 句末にあつて詰問の語気をそえる。

薬山、一処に在りて坐す。師問う、棄は這裏に在つて什摩をか作す。对えて曰く、一物も也た為さず。師曰く、与摩ならば則ち閑坐す。对えて曰く、若し閑坐せば則ち為すなり。師曰く、棄は為さずと道えり。今の什摩をか為さざる。对えて曰く、千聖も亦た識しず。

師は偈を以て讃じて曰く、従来共に住むも名を知らず、任運に相い將て作摩に行くのみ。古えよりの上賢すら猶お識らず、造次の常流豈に明らむ可けんや。

僧拈じて柔南に問う、既に是れ千聖なるに什摩と為てか識らざる。答えて曰く、千聖は是れ什摩の苴鳴声ぞ。

・作摩行 作摩は只摩の誤りか。

・造次 いいかげんな。

・千聖是什摩苴鳴声 苴鳴声は湯をついだときに椀が立てる無機的な音。くだらない音。什摩はここでは疑問詞ではなくて感嘆詞。なんと見事な、なんとくだらない。

師、僧に問う、什摩処いすこよりか来たれる。对えて曰く、江西より来たれり。師曰く、江西に還た馬祖を見しや。对えて曰く、見たり。師は乃ち一柴瀘を指して曰く、馬師は這個いすこに何似れぞ。僧無对。却迴きやういして師に拳似し、師の決を為さんことを請えり。馬師曰く、汝

観るに柴瀘は大小ぞ。対えて曰く、勿量に大なり。馬師曰く、汝は甚だ壮大の力有り。僧曰く、何が故に此の説ありや。馬師曰く、汝は南岳より一柴瀘を負い来たり、豈に是れ壮大の力ならずや。

・何似 二つのものを比較して前者は後者にくらべてどうだと問うときに用いる。後者がの方がまじではないか、といつ含みの場合が多い。

・柴瀘 薪。

・大小 大きさを尋ねる疑問詞。

・却廻 もどる。

師は参同契を述べて曰く、竺土の大仙心、東西密に相い付す。人根に利鈍有るも、道に南北の祖無し。靈源は明らかにして皎潔、技派は暗くして流注す。事に執するは元より是れ迷い、理に契うは亦た悟りに非ず。門門一切境、廻互と不廻互と。廻して更も相い涉り、尔らずして位に依りて住す。色は本より質と象とを殊にし、声は源より楽と苦とを異にす。暗は上中の言と合し、明は清濁の句を暗にす。四大は性自として復すること、子の其の母を得るが如し。火は熱く風は動揺し、水は湿い地は堅固なり。眼には色あり耳には声音あり、鼻には香あり舌には鹹醋あり。然して一一の法に於いて、根に依りて葉の分布す。本末は須らく宗に歸すべし、尊卑の其の語を用う。明中に當つて暗有り、明を以て相い遇うこと勿れ。暗中に當つて明有り、暗を以て相い観ること勿れ。明暗は各おの相い対す、譬えば前後の歩の如し。万物は自ら功有り、当に用の及ぶ所を言つべし。事存して函蓋合し、理応じて箭鋒住す。言を承くるときは須らく宗を会すべし、自ら規矩を立つること勿れ。触目道を見ず、運足焉ぞ路を知らん。歩を進ること近遠に非ず、迷えば山河を隔つるのみ。謹んで参玄の人に白す、光陰虚しく度ること勿れ。

・声源異樂苦 伝灯録三十は源を元とする。

・理応箭鋒住 同じく住を窟とする。

・性目 自は副詞語尾。

師は、隱峯と草を党る次いで蛇を見る。師は鍬子を過して隱峯に与う。隱峯は鍬子を接し了り、怕れて敢えて手を下さず。師却つて鍬子を拈じ、截つて兩段と作し、隱峯に謂いて曰く、生死すら尚お未だ過ぎ得ざるに、什摩の仏法をか学ばん。

師は鍬子を將つて草を党る次いで隱峯問う、只だ這个を党り得るのみなりや、還た那个をも党り得るや。師は便ち鍬子を過して隱峯に与う。隱峯は鍬子を接得して、師に向つて党ること一下す。師曰く、棄は只だ這个を党り得るのみ。洞山代つて曰く、還た堆阜有りや。

師は唐の貞元六年庚午の歳十二月六日歿せり。春秋九十一、僧夏六十三。僖宗皇帝、無際大師見相の塔と諡号す。

溥源和尚、忠国師に嗣ぐ。是れより先、馬大師の門人たり。師は京に入りて国師の侍者と為り、後に再び馬大師に見え、大師の前に於いて旋行一匝して円相を作り、然る後、中心に於いて礼拜せり。大師曰く、棄は作仏せんと欲するや。對えて曰く、某甲は捏目する解あわす。大師曰く、吾は汝に如かず。

・解 できるという意味の当時の口語、文語の能に当る。

・捏目 目をこする。物をもつとよく見よつとする仕事。

百丈の艶潭に在りて車を推す次いで、師問う、車は這裏に在り、牛は什摩処に在りや。百丈は手を以て斫額す。師は手を以て目を拭う。

・斫額 高くて遠いところを望む仕草。

天皇和尚、石頭に嗣ぐ、荊南に在り。師諱は道悟、未だ行状を覩ざれば終始の要を決せず。

師は初め石頭に問う、智慧を離却して、何法をか人に示す。石頭曰く、老僧には奴婢無し。什摩をか離せん。進んで曰く、如何にしてか玄旨を得ん。石頭曰く、棄は解く風を撮むや。若し与摩ならば則ち今日よりし去らざらん。石頭曰く、未審し汝は早晚那边より来たりしや。師曰く、専甲は是れ那边の人ならず。石頭曰く、我は早今に汝が来処を知れり。師曰く、和尚も亦た人に贓賄するを得ず。石頭曰く、汝が身現に在り。師曰く、此くの如しと雖然も、畢竟如何んが後人に示さん。石頭云く、棄道え、阿誰か是れ後人なる。師は礼謝して深く玄要を領せり。

・贓賄 伝灯録は贓証とする。

問う、如何なるか是れ玄妙の説。師云く、我れは仏法を解すと道うこと莫れ。学人の疑滞を争那何んせん。師曰く、何ぞ老僧に問わざる。僧曰く、問うことは則ち問いたれり。師云く、去れ、是れ棄が存泊する処ならず。

・如何是玄妙之説 原文には是字なし。伝灯録によつて補つ。

師は乃ち一日忽然として典座を喚べり。典座来たる。師示して曰く、会するや。曰く、会せず。師便ち枕子を把つて当面に之を抛ち、乃ち寂を告げたり。

戸慈和尚、石頭に嗣ぐ。順宗皇帝、師に問う、大地に普き衆生は見性して佛道を成ず。師曰く、仏性は猶お水中の月の如し、見る可くして取る可からず。大義禪師曰く、仏性は非見にして必ず見る。水中の月何ぞ攫取せざる。帝は炙して之を然りとす。

又た大義に問う、何者か是れ仏性。大義云く、陛下の問う所を離れず。皇帝爰して玄関に契い、一言もて遂に合す。

丹霞和尚、石頭に嗣ぐ。師諱は天然、少くして儒墨に親しみ、業は九經を洞らむ。

初め抛居士と同侶にして、京に入りて選を求む。因りて漢南道に在りて寄宿せる次いで、忽ち夜に日光の室に満つるを夢む。鑿者有りて云く、此は是れ解空の祥なり、と。又た行脚の僧に逢い、与に喫茶する次いで、僧云く、秀才、何処にか去く。對えて曰く、官に選ばるることを求め去る。僧云く、可惜おしむべし許功夫、何ぞ仏に選ばれ去らざる。秀才曰く、仏は当た何処にてか選ばるる。其の僧は茶苳を提起して曰く、会するや。秀才曰く、未だ高旨を測らず。僧曰く、若し然らば、江西馬祖の今現に世に住して説法す。悟道の者は勝げて記す可からず。彼は是れ眞の選仏の処なり。

二人は宿根猛利なり、遂に秦遊を返して大寂に造れり。礼拝し已つて、馬大師曰く、この漢来たりて作摩をか作す。秀才は薩頭を汰上す。馬祖便ち機を察し、笑つて曰く、汝が師は石頭なりや。秀才曰く、若し与摩ならば則ち某甲が与に石頭を指示せよ。馬祖曰く、這裏より南嶽に去くこと七百里、遷長老の石頭在り。棄は那裏に去きて出家せよ。

・汰上薩頭 汰上が詳かではない。伝灯録は以手托薩頭額とする。

・汝師石頭摩 二この摩は推測を表わす。

秀才当日に便ち発し去り、石頭に到りて和尚に參す。和尚問つ、什摩処より來たるや。對えて曰く、某処より來たる。石頭曰く、來たりて什摩をか作す。秀才は前の如く對えり。石頭便ち點頭して曰く、槽廠に著き去れ。乃ち爨役を執りて一二載を経たり。石頭大師明晨与に落髮せんと欲す。今夜童行の參せし時、大師曰く、仏殿前の一塔の草、明晨粥後に党却せん、と。來晨諸の童行競いて鍬鏝を持せり。唯だ師のみ有つて独り刀水を持し、大師の前に於いて跪拜して揩洗せり。大師は笑つて剃髮せり。師に頂峯の突然として起る有り。大師は之を按じて曰く、天然、と。落髮すること既に畢り、師は礼して度を謝し兼ねて名を謝せり。大師曰く、吾は汝

に何の名を賜いしや。師曰く、和尚豈に天然と曰わざりしや。石頭甚だ之を奇とす。乃ち為に法要を略説す。師便ち耳を掩つて云く、太だ多し。和尚云く、汝誠に作用し看よ。師遂に聖僧の頭に騎る。大師云く、この阿師、他後、泥龕塑像を破り去らん。

・他後 いつか。

師受戒し已る。而るに大寂の摩尼を江西に耀かせり。師乃ち嶽を下つて再び彼に詣り、大寂に來謁す。大寂問う、什摩処よりか來たる。對えて曰く、石頭より來たる。大寂曰く、石頭は路滑か、還た勢倒せしや。對えて曰く、若し勢倒せしならば即ち此に來たらじ。大寂甚だ之を奇とせり。

師は情懷を放曠し、違順の境を濶し、雲水を樂しみ、去住逍遙し、洛京に至りて忠国師に參ず。初め侍者を見て問う、和尚は還た在りや。對えて曰く、在り、只だ是れ客を看ず。師曰く、大深遠生。侍者曰く、仏眼も次不見。師曰く、竜は竜の子を生み、鳳は鳳の子を生む。侍者、国師に拳似す。国師便ち侍者を打つ。

師尋いで、馭州の丹霞山に上るに、格調孤峻にして攀ずる者少なし。爰に禅徳有り、遠く來たりて問津し、山下に師に遇見して遂に輒ち問を申ぶらく、丹霞は什摩処に在りや。師は山を指して曰く、青青剗剗底是なり。禅徳曰く、只だ這個便ち是なること莫きや。師曰く、眞の師子兒は一撥して便ち転ず。

次いで天台に於いて花頂峯に居ること三載。又国一禅師を礼す。元和の初を以て、竜門の香山に上り、伏牛禅師と莫逆の侶と為る。後、恵林寺に於いて天の寒きに遇えり。木仏を焚きて以て禦ぐ次いで、主人或いて譏る。師曰く、吾は茶豊して舍利を覓む。主人曰く、木頭に何か有らん。師曰く、若し然らば、何ぞ我を責めん。主人亦た向前するに、眉毛一時に墮落せり。

人有つて眞覺大師に問う、丹霞、木仏を焼く。上座に何の過有りや。大師云く、上座は只だ仏を見るのみ。進んで曰く、丹霞は又

た如何ん。大師云く、丹霞は木頭を焼くのみ。

・眉毛一時墮落 謗法の者は眉毛が墮落するといふ。金剛經26に「若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来」と言つ。

師は有る時、山院に到りて寄宿し、老宿の行者と共に床を同じくして坐せるを見る。師は衣鉢を放下して便ち二人に問訊せり。二人は都て顧視せず。直に來朝に至り、遂に行者の一鐺の飯を將つて、堂の中心に向いて著き、老宿と共に喫し、又た師を喚ばず。師も亦た自ら向前して共に喫せり。行者は師の向前するを見て便ち老宿を顧視して云く、早きを侵して起くと言つこと莫れ。師は老宿に向つて曰く、這個の行者、何ぞ伊に大無礼なることを教えざる。老宿云く、好个の人家の男女、什摩の罪過か有る。他を点汚して什摩をか作す。師云く、適來は泊んど錯つて放過せんとす。

・放下 置く。

・莫言侵早起 趙州録下に似た話があり、莫言侵早起、更有夜行人の二句になっている。朝早く起きたと言つな、どうこい夜のうちに旅している人が居る。上には上がある、と云ふこと。

・泊錯放過 うっかりと見過ごすところだった。

師は孤寂吟を作りて曰く、時人は余の孤寂を守るを見、為言すらく一生涯する所無からん、と。余は則ち孤寂章を閑吟して、始めて知んぬ光陰は虚しく擲たず、と。光陰を棄てずして須らく努力すべし、此の言は説くと雖も人は識らず。識る者は同じく為して一路に行く、豈に顛墜して榛聯に縁る可けんや。榛聯茫茫何か是れ辺、只だ終朝衆喧を尽くすことを為すのみ。衆喧不覺にして涯際無く、哀れなるかな眞実は虚しく伝えず。之を伝え之を響かすも只だ聞かず、猶お灯燭の盃盆を合するが如し。共に惣に光明の在る有りを知るも、見る時は未だ免れず暗昏昏。昏昏として不覺に一生了る、斯の類は塵沙にして比る少なからず。直に潭中の吞鉤の魚に似、何ぞ空中の盪羅の鳥に異ならん。此の患は由來眞に是れ長く、四維上下に遠く茫茫。倏忽の間に病死に迷い、塵勞は脱し難くし

て哭して愴愴。愴愴として哀怨するも終に益無く、只だ身を將つて痛室に居ることを為すのみ。此の時に到つて悔ゆるも何ぞ及ばん、雲泥未だ孤寂を訪ぬ可からず。孤寂の宇宙は窮めて良しと為す、長吟高臥す一閑堂。寒風の落葉を吹くを慮らず、豈に桑草の遍く霜に遭つを愁えんや。但だ看る松竹歳寒の心、四時不変流清の音。春夏暫く為す群木の暎、秋冬方に靦る鬱たる高林。故より知る世相に剛柔有ることを、何ぞ必ずしも心を將つてせん清濁の流。二時の麴糖は縁に隨つて過し、一身遮莫せもあつはあれ布毛の裘。隨風逐浪して東西に住し、豈に愁えんや地の未ると天の低きとを。時人は未だ解せずして將つて錯と為すも、余は則ち了然として自ら迷わず。迷わざれば須らく不迷の心有るべく、看る時は浅浅なるも用いる時は深し。此今の真珠若し採得すれば、豈に樵夫の黄金を負うに同じからんや。黄金は亨萼して転た真と為り、明珠は光を含んで未だ人に示さず。了すれば即ち毛端に巨海を滴らせ、始めて知る大地の一微塵なることを。塵滴存するや未だ冒を免れず、這辺を棄てて那辺に留まること莫れ。直に長空に鳥跡を搜すに似て、始めて玄中に又た更に玄なることを得ん。一を挙げて例諸は知る可きに足る、何ぞ用いん説引の詞を喃喃することを。只だ見る餓夫の来たりて飽くを取ることを、未だ聞かず漿逐いて渴人の死せることを。多人道を説きて道行われず、他家は未だ悟らず詐頭明なることを。三寸の利刀の曠路を開けば、万株の榛聯の身を擁して生ず。塵滓茫茫として都て知らず、空しく弁口を將つて玄微を瀉す。此の物那ぞ堪えん大用を為すことに、千生万劫貧兒と作らん。聊か孤寂を書して事は遷た深し、鐘期は能く聴く白牙の琴。道者知音は其の掌に指す、方に貴くして名づけて孤寂吟と為す。

・ 為言 二字で言つこの意。王梵志詩レニングラド本37)に「可永世間人、為言恒不死」という例がある。

・ 詐頭明 本来は詐明頭であるが、押韻のつこつによる。明頭を詐る、つまりかたること、分かつたつもりでいること。

・ 多人説道道不行 臨濟録示衆九、若人修道道不行、万般邪境競頭生」。

師に又た翫珠吟有り、衣中の宝を識得して、無明は酔いの自ら醒めたり。百骸俱に潰散し、一物鎮長に靈たり。境を知れば渾べて体に非ず、珠を尋ぬれば形を見ず。悟れば即ち三身仏、迷疑すれば万巻の経。心に在つて心は豈に測らんや、耳に居りて耳は聴く

こと難し。罔象天地に先んじ、洌玄杳冥より出づ。本より剛くして鍛鍊するに非ず、元より淨くして澄停する莫し。盤泊して朝日を  
 逾え、玲瓏として暎星よりも估く。瑞光流れて滅せず、真澄濁りて還た清し。誦寶の寂も鑿照し、法界の明を勞籠す。凡を店して功  
 は滅せず、聖を超えて果は盈つるに非ず。竜女は心より親しく献じ、蛇王は口もて自ら傾く。鵝を護りて人却つて活き、黄雀は義猶  
 お軽し。解く語るも舌に關するに非ず、能く言つても是れ声ならず。辺も絶して弥よ瀚漫、際無くして空の平らかなるに等し。教を演  
 べて教と為さず、名を聞きて名を認めず。二辺俱に立たざれば、中道は行くを須いず。月を見て指を看るを休め、家に歸りて程を問  
 うを罷む。識心豈に仏を測らんや、何の仏か更に成るに堪えん。

・無際等空平 原文は三際等空平。伝灯録三十に従つて改める。

・識心豈測仏 伝灯録は識心則仏とする。

又た頌に曰く、丹霞に一宝有り、之を蔵して歲月久し。從來人は識らず、余は自ら独り防守す。山河にも隔得すること無く、光明  
 は処処に透る。體寂にして恒に湛然、瑩徹して塵垢無し。世間の採取人は、顛狂して路を逐うて走る。余則ち渠の為に説けば、撫掌  
 して口を笑破す。忽し解空の人に遇えば、放曠して林藪に在り、相い逢つて生げ出ださざるも、意を拳ぐれば便ち有ることを知らん。

師に又た驪竜珠吟有り、驪竜珠、驪竜珠、光明燦爛として人と殊る。十方世界に求むる処無く、縦然たとい求め得るも亦た珠に非ず。珠  
 は本有にして、昇沈せず、時人は識らずして外に追尋す。行きて天涯を尽くして自ら疲極す、如かず自家の心を駄取せんには。求覓  
 する莫れ、功夫を損せん、転た求め転た覓めて転た元より無し。恰かも渴鹿の陽平を趁つが如く、又た狂人の道途に在るに似たり。須  
 らく自ら駄すべし、了として分明ならん、了得すれば更に磨瑩するを用いず。深く知る是れ人間に得るならず、六類及び生靈は論ず  
 るに非ざることを。虚しく意を用いれば、精神を損す、如かず閑処して織塵を絶たんには。心を停め意を息めて珠は常に在り、途中  
 に向いて別に人に問う莫し。自ら迷失するも、珠は元より在り、此今の驪竜は終に改めず。五陰山に埋在すると雖いへ然も、自らはれ時

人の懈怠を生ず。珠を識らず、毎に抛擲す、却つて驪電前に向つて客と作る。身は是れ主人公なることを知らずして、驪電を棄却して別処に見む。宝を認取すれば、自家の珍なり、此の珠は元より是れ本来人。拈得し翫弄して窮尽無し、始めて覚る驪電本より貧ならざることを。若し能く驪珠を睥了して後ならば、只だこの驪珠は我が身に在るのみ。

・非論・・・は言わずもがな。

師に弄珠吟有り、般若の神珠は妙にして測ること難く、法性海中に親しく認得す。隱現して時に遊ぶ五蘊山、内外の光明大神力あり。此の珠は状無くして大小に非ず、昼夜円明にして悉く能く照す。用いる時は処無く復た蹤無く、行住相い随つて常に了了。先聖相い伝えて相い指授するも、此の珠を信する人は世に希有なり。智者は明と号して珠を離れず、迷人は珠を將つて識らずして走る。吾が師は権りに指して摩尼に喩え、採人無数にして春池に入る。争つて瓦礫を拈じて將つて宝と為す、智者は安然として之を得たり。言下に近きに非ず亦た遠きに非ず、体用如如にして転じて転ずること無し。万機に珠は対す寸心の中、一切時中巧方便。皇帝は曾つて赤水に遊び、視聽争い求むるも都べて遂げず。罔象は無心にして却つて珠を得、能見能聞は是れ虚偽なり。自心に非ず、因縁に非ず、妙中の妙玄中の玄。森羅万象は光中に現われ、之を尋めるに根元有るを見ず。六賊を焼き、四魔を爍す、能く我山を推き愛河を竭くす。竜女は靈山に親しく仏に献じ、貧兒は衣裏にして狂いて蹉愴す。亦た性に非ず、亦た心に非ず、性に非ず心に非ずして古今を超越。躰は名言を絶ちて名づけ得ず、時を権りて題して弄珠吟と作す。

師、麻浴と游山し、澗辺に到りて語話する次いで、麻谷問う、如何なるか是れ大涅槃。師は頭を迴して云く、急なり。浴曰く、个の什摩にか急なる。師云く、澗水。

・卷十六南泉章問、如何是涅槃。師云、清猶清、急猶急、浮沙何処停」。

師初めて開堂せし時、有る人問う、作麼生か語話すれば即ち門風に墮せざるを得ん。師曰く、語話するに一任すれば、即ち門風に墮せじ。僧云く、便ち請う和尚語話せよ。師曰く、青山堅水は相い似ず。

師、僧を勸して曰く、什摩<sup>いすこ</sup>処よりか来たる。對えて曰く、山下より来たれり。師曰く、喫飯せしや。對えて曰く、喫飯し了れり。師曰く、飯を將つて闇黎に与えて喫せしめる底の人は、還た眼有りや。僧無對。

有る人の匠山に拳似す。匠山云く、有り。進んで曰く、眼は什摩処に在りや。匠山曰く、眼は頂上に在り。人有つて此の語を持して洞山に拳似す。洞山云く、若し是れ匠山ならざれば、いかでか解く<sup>と</sup>摩に道わん。僧便ち問う、作麼生か是れ頂上に在る底の眼。洞山云く、不昧向上。

招慶拈じて保福に問う、飯を將つて人に与えて喫せしむるは、恩を感じることは則ち分有り。什摩と為てか却つて眼を具せざるに成り去る。保福云く、施者受者二俱に瞎漢。慶云く、忽ち人有つて其の機を尽くし来たらば、還た瞎漢と成るや。保福曰く、和尚は還た人の為にするや。慶云く、某甲をして阿誰と共に商量せしめん。保福は尋いで後に曰く、某甲を瞎漢と道うは得たりや。

師に亦た如意頌有りて曰く、真如なる如意宝、如意宝なる真如。森羅及び万象、一法にして更に余り無し。海澄みて孤月照し、天地は洞然として虚し。寂寂たり空なる形影、明明たり一道の如。

師は長慶三年癸卯の歳六月二十三日を以て、門人に告げて湯を備えしめ、沐し訖つて云く、吾は將に行かんとす、と。乃ち笠子を戴せて策杖し、入禰して一足を垂れ、未だ地に至らずして逝けり。春秋八十六、智通大師妙覺の塔と勅諡す。劉軻碑文を撰す。

招提和尚、石頭に嗣ぐ、師諱は惠朗、姓は歐陽、韶州曲江の人なり。年十三にして馭林寺の摸禪師の処に於いて出家す。十七にして衡岳に遊び、二十にして受戒し、乃ち虔州搜公山に往きて大寂に謁す。大寂云く、棄は来たりて何をか求むる。對えて曰く、仏知

見を求む。大寂曰く、仏に知見無し、知見は乃ち魔界なるのみ。棄は南岳より来たるも、未だ石頭の曹溪の心要を見ざるに似たるのみ。汝は心に石頭に却歸すべし。師は遂に言に依りて返り、石頭に造れり。果たして大寂の言に応じて、縁に契いて悟達せり。招提を出でざるもの三十余年、因りて招提朗と号す。元和十五年庚子の歳、正月二十二日に遷化せり。春秋八十三、僧夏六十四なりき。

薬山和尚、石頭に嗣ぐ。朗州に在り。師諱は惟儼、姓は韓、絳州の人なり。後に南康より年十七にして潮州西山の慧照禪師に事う。大曆八年衡岳寺希凜律師より受戒す。

師は一朝言いて曰く、大丈夫は当に法を離れて自ら淨かるべし。焉んぞ能く屑屑として細行を布巾に事とせんや、と。即ち石頭大師に謁して密に玄旨を領ぜり。師は貞元の初に於いて、須陽の籠薬山に居す。因りて薬山和尚と号す。

師初めて住せし時、村公に就いて牛欄を乞つて僧堂を為れり。住すること未だ多時を得ざるに近ほほ二十来人有り。忽然として一僧の来たる有り、他に請つて院主と為らしむ。漸漸にして近四五十人有り、所在迫狹す。後山の上に就いて小屋を起て、和尚を請し去り、上頭に安下せしむ。和尚上頭又転転師僧主。

其の院主の僧再三、和尚に為人説法せんことを請えり。和尚は一二度は許さず。第三度にして方始はじめて許しを得たり。院主は便ち歡喜して先ず大衆に報ぜり。大衆は喜び自ら勝えずして、打鐘して上來せり。僧衆纒かに集まるや、和尚は門を閑却して便ち丈室に歸れり。院主は外に在りて責めて曰く、和尚は適来、某甲に為人することを許せり。如今什摩に因りて却つて為人せずして某甲を賺すや。師曰く、経師には自ら経師の在る有り、論師には自ら論師の在る有り、律師には自ら律師の在る有り。因主恠むらく、貧道いずこ什摩いずこ処にか此れより後從容せん。

数日を得て後、昇座しんざす。便ち人有りて問う、未審いぶかし和尚は什摩人に承嗣せるや。師曰く、古佛殿裏に一行の字を拾得せり。進んで曰く、一行の字は什摩と道うぞ。師曰く、渠は我に似ず、我は渠に似ず。所以に這个の字を肯う。

・和尚上頭又転師僧王 本文に乱れがあるであらう。

・纒 〽するや否や、〽したとたん。

・従容 愆憑に同じ。誘導。

李裁相公来たりて和尚に見ゆ。和尚は看経する次いで、殊に采顧せず。相公は肯えて礼拝せず、乃ち軽言を発す、面を見るは名を聞くに如かず、と。師、相公を召す。相公応稜す。師曰く、何ぞ耳を貴んで目を賤しむことを得たるか。相公便ち礼拝し、起ち来たりて問を申ぶ、如何なるか是れ道。師は天を指し、又地を指して曰く、雲は青天に在り、水は瓶に在り。相公礼拝す。

後に偈を以て曰く、身形の鶴の形に……を練得し、千株の松下函函の経。我聞……天……、水は瓶に在り。

・殊不采顧 全くとり合わなかった。

・見面不如千里聞名 会つてみたら噂ほどではなかった。

・貴耳而賤目 他人の判断に価値を置いて、自分で確かめることをしない。菩提達摩南宗定是非論に汝但知貴耳賤目、重古輕今

(神会和尚遺集三二六頁)。

・李裁の偈は伝灯録十四では次の通りである。練得身形似鶴形、千株松下函函経。我来問道無余説、雲在青天水在瓶。

師因一 上 夜而大笑一声、須陽東来、去 山九十里 人、其夜同聞笑声、尽日是東家声来。 互東推、直

至葉山。徒衆曰夜聞和尚山頂。 李相公讚曰、選得幽居衢野情、終年無 亦無。 有時直上孤峯頂、月下披雲笑一声。

・伝灯録は次の通りである。師は一夜、山に登りて経行す。忽ち雲の開けて月を見、大笑一声せり。応る須陽の東九十許里の居民は、尽く東家なりと謂えり。明晨、迭相して推問するに、直に葉山に至れり。徒衆云く、昨夜、和尚山頂に大笑せり、と。李裁再び詩を贈つて曰く、幽居を選び得て野情に衢い、終年送る無く迎うる無し。有る時直に上る孤峯頂、月下に雲を披きて笑つこと一声。

相公 して問う、如何なるか是れ戒定慧。師曰く、貧道が這裏には這个の閑家具無し。

問う、己事未だ明らめず、和尚の旨を指さんことを乞う。師は沈吟すること良久して曰く、吾れ今汝が為に一句を道うことは亦た難からず、只だ宜しく汝は言下に於いて しまるべし。

・伝灯録は次のようである。僧問、己事未明、乞和尚指示。師良久曰、吾今為汝道一句亦不難、只宜汝於言下便見去、猶較些子。若更入思量、却成吾罪過。不如且各合口、免相累及。

師因みに沙弥を喚ぶ。道吾曰く、沙弥童行を用いて什摩をか作す。師曰く、這个有るが為なり。吾曰く、何ぞ棄却せざる。師曰く、有り来たること多少時ぞ。

師因みに石頭垂語して曰く、言語動用するも亦た勿交渉。(師)曰く、言語動用すること無きも亦た勿交渉。石頭曰く、這裏は針も浜不入。師曰く、這裏は石上に花を栽つるが如し。

人有つて拈じて柔南に問う、古人は石上に花を栽つ。意は作麼生。柔南曰く、汝の大いに瞻るに伏す。却つて曰く、還た会するや。対えて曰く、会せず。云く、癩人の猪肉を喫す。

・勿交渉 全く無縁

・石上栽花 石の上に花を咲かせる。言葉も行動も届かない秘奥の消息を開示する手なみ。

師、僧に問う、近ごろ什摩処を離れしや。対えて曰く、近ごろ百丈を離れたり。師曰く、海師兄は一日十二時中、師僧の為に什摩

の法を説くや。対えて曰く、或いは曰く六句外に会取せよ、と。或いは曰く、未だ玄鑿を得ざる者は且く了義教に依れ、猶お相い親しむ分有らん、と。師曰く、三千里外、且く喜ぶ、勿交渉なることを得たることを。

・且喜得勿交渉 お見事なすかたんだ。見当ちがいを冷やかす言い方。

師帯刀して行く次いで、道吾問う、背後底は是れ什摩ぞ。師は抜刀して便ち熨口に研る。

・熨口 口めがけてまっこうに。

師夜点火せず。僧立つ次いで、師乃ち曰く、我に一句子有り、特牛の児を生むを待ちて即ち汝が為に説かん。僧曰く、特牛児を生み了れり。只だ是れ和尚説かざるのみ。師便ち火を索む。火来たれり。僧便ち身を抽いて衆に入る。

後、雲岳の洞山に挙似す。洞山曰く、此の僧は却つて道理を見たり。只だ是れ肯えて礼拝せざるのみ。

僧拈じて長慶に問う、既に是れ見る、什摩と為てか肯えて礼拝せざる。慶曰く、只だ無礼なるが為のみ。

白蓮拈じて僧に問う、既に道理を見たるに、什摩と為てか肯えて礼せざる。無対。白蓮代つて曰く、更に出頭するを欲得せず。

師又の時に沙弥を喚ぶ。雲岳曰く、他を喚んで什摩をか作す。師曰く、我に折脚の鐺子有り、伊の堤上堤下せんことを要す。岳曰く、若し与摩ならば則ち某甲と和尚と、一人一手を出ださん。

・鐺子 二本脚の付いたなべ。その脚が折れて使い物にならないものを無功用の当体に喩える。

師又の時に僧に問う、汝は諸方に行脚し来たれり、難得底の物を見取し来たるや。僧の対えは中たらず。師曰く、什摩の用をか作すに堪えん。師代つて曰く、閨閣の滞する所に縁らずして、覓め来たること久し。

師、雲岳に問う、什摩をか作す。对えて曰く、擔水す。師曰く、那个尼。对えて曰く、在り。師曰く、棄は来去して阿誰の爲にかする。对えて曰く、渠に替りて東西す。師曰く、何ぞ伊をして並頭して行かしめざる。对えて曰く、和尚、他を謾ること莫れ。師曰く、合に与摩に道つべからず。師代つて曰く、還た曾つて擔擔せしや。

・尼 詰問の語の余声。在、弼、機とも書く。

・東西 出あるく。

師有る時曰く、我に一句子有り、未だ曾つて人に向つて説かず。道吾曰く、相い随い来たれり。

師、僧に問う、汝は什摩処より来たる。对えて曰く、南泉より来たる。師曰く、彼中かしこに有ること多少時ぞ。对えて曰く、冬を経て夏を過せり。師曰く、与摩ならば則ち一頭の水簍牛と作り去りしならん。对えて曰く、彼中に在りと雖も曾つて他の食堂に上らざりき。師曰く、只だ東西の風を喫するのみなる可からず。对えて曰く、錯ること莫れ、和尚は自ら人の匙筋を把る在る有り。

雲岳問う、一句子は如何にしてか言説せん。師曰く、言説に非ず。道吾曰く、早すてに説き了れり。

雲岳因みに百丈齋を乞う。師問う、陰界は喫せず、乞つて阿誰にか与う。对えて曰く、一人の要する有り。

因みに于迪相公、紫玉に問う、仏法の至理は如何ん。玉、相公の名を召す。相公応答す。玉曰く、更に別に求むること莫れ。師聞きて拳して曰く、這個の漢を搏殺せよ。僧便ち問う、師は如何ん。師代つて曰く、是れ什摩ぞ。

院主、和尚に報じて鍾を打つや、和尚に上堂せんことを請う。師云く、汝は我が与に鉢盂を生げ来たれ。院主会せず。雲岳云く、和尚は手脚無くして来たること多少時ぞ。師曰く、汝は只だ是れ枉むなしく袈裟を被るのみ。岳曰く、某甲は只だ与摩、和尚は如何ん。師曰く、我に這个の眷属無し。

・上堂 法堂に行くことと共に、食堂に行くことをもいつ。

・枉 むなしく、徒らに。

師、園頭に問う、什摩をか作し来たる。对えて曰く、菜を栽え来たれり。師曰く、栽つることは則ち汝を障えず、根をして生ぜしむること莫れ。園頭曰く、既に根をして生ぜしめず、大衆は今の什摩をか喫せん。師曰く、棄に還た口有りや。

師は一の佛の字を書きて道吾に問う、是れ什摩の字ぞ。吾曰く、是れ佛の字なり。師曰く、咄、這の多口の阿師。千仏代つて叉手し退後して立つ。又た薬山の第二機に代つて曰く、錯。

・多口阿師 おしゃべり坊主。

・代薬山第二機 咄、這多口阿師に代語する。

僧有り薬山に在りて三年飯頭と作る。師問う、汝は此間に在ること多少時ぞ。对えて曰く、三年なり。師曰く、我は惣に汝を識らず。其の僧会せず、恨みて発し去れり。

問う、学人に疑い有り、請う師決せよ。師曰く、且らく上堂の時の来たるを待たん。師は晩際上堂して曰く、今日僧の疑いを決せんとする有り、什摩処にか在る、出で来たれ。其の僧纒かに出で来たるや、師は便ち托出して却つて房丈に入れり。

師行く次いで、雲岳避けて辺側に立ち、師の到るを待ちて云く、後底、後底。師便ち嚙口に醇す。

・醇 げんこつを喰わす。

問う、如何にしてか諸の境惑を被らざるを得ん。師曰く、他を聴すも何ぞ棄を碍げん。僧曰く、学人会せず、此の意は如何ん。師曰く、何の境か棄を惑わす。

問う、如何なるか是れ道中に宝を指す。師曰く、撒曲すること莫れ。進んで曰く、撒曲せざる時は如何ん。師曰く、国を傾くるも換えず。

道吾和尚は四十六にして方始めて出家す。俗姓は王、鍾陵建昌県の人なり。雲岳先に出家し、百丈に在りて侍者と造る。道吾は屋裏に在り。探官を報じて一日に五百里を行き得たり。恰も百丈の莊頭に到りて喫飯せんことを討む。当時侍者も亦た莊頭に下りたり。莊主は侍者を喚んで客に対せしむ。侍者来たりて相看し、一切せし後に便ち問う、將軍は是れ什摩処の人ぞ。曰く、鍾陵建昌の人なり。貴姓は什摩ぞ。對えて曰く、姓は王なり。侍者は便ち家兄なることを認得して、便ち手を把つて啼哭して云く、嬢は在りや。對えて曰く、師兄を憶うて哭すること太搬しく、一隻眼を失却して下世し去れり。

侍者は消息を得て、当日便ち百丈に上れり。侍者は兄を領して和尚に參じ、一切せし後に侍者便ち和尚に諮白す、這个は是れ某甲の兄にして、師に投じて出家せんと欲す、還た得たりや。百丈曰く、某に投じて出家することは得ず。侍者曰く、作麼生ならば即ち是ならん。百丈曰く、師伯の処に投じて出家せよ。

侍者は領して師伯の処に去き、具さに前事を陳べたり。師伯便ち許せり。兄は投じて出家せり。後に侍者は師弟を領して入京し、受

戒せしめ了つて却つて転じ来たつて百丈に近づき、兩人坐地して歇息する次いで、道吾起ち来たつて礼拝して曰く、某甲に一段の事有り、問わんと欲すること多時なるも未だ其の便を得ず。今日幸有り、啓して師兄に問わん、還た得たりや。岳曰く、什摩の事有りや。吾便ち問う、這個の穀漏子を離却して後、師兄と什摩処にか相見するを得ん。岳曰く、不生不滅の処に相見せん。吾曰く、草裏に人無しと道うこと莫れ、自ら鑿人有り。岳曰く、作摩、是れ棄は薩頭の痕子すら尚お猶お在るに、這個の身心有り。吾曰く、師兄に啓す、這個の言詞を下すこと莫れ、仏法は僧俗に在らず。岳便ち問う、与摩ならば理長すれば則ち就く。師弟作摩生。吾曰く、不生不滅の処に非ざるも亦た相見を求めず。雲岳後に曰く、灼然たり是れ棄は眼目の与摩に細なることを得たること。便ち百丈に歸りて一年を過ぎ得たり。

・坐地 二字で坐るといふ意。地は意味のない接尾語。

・穀漏子 食べた穀物が通り抜けるだけの身という意で、身体をさげすんでいふ。

・理長則就 この方が筋が通つていふと見たら、それに加担する。

後に道吾は百丈を辞して便ち薬山に到れり。薬山問う、一句子云何が言説する。吾曰く、一人有つて惣に曾つて言説せず。師曰く、大蔵小蔵は何よりか来たれる。吾曰く、傍出す。師は甚だ之を奇とせり。此れに因りて学禪して滋味を得てより後、只だ師兄の来たらんことを觀望するのみ。

一日有つて書を造れり。書上に説く、石頭は是れ眞金鋪、江西は是れ雜貨鋪。師兄は彼中に在りて墮根して作摩をか作す。千万千萬速やかに来たれ速やかに来たれ、と。雲岳は這個の信を得てより後、只管に憂慮せり。

一日有つて和尚の身辺に在つて侍立し、直に三更に到れり。和尚曰く、且らく歇え。岳去らず。和尚曰く、棄は什摩の事有つて顔容瘦悪せるや。恰も肚裏に事有るに似たり。事有らば但だ説け。雲岳云く、事無し。和尚曰く、是れ智闍黎の信を得たること莫しや。

岳云く、不敢。百丈は道吾の信を索めたり。岳便ち取りて和尚に呈似せり。和尚見了つて云く、灼然たり、是れ我を生む者は父母、我

を成す者は朋友なること。棄は我が這裏に在るを用いず、便ち速やかに去け。岳曰く、敢えて去かず。百丈曰く、我に書有り兼ねて信物有り、薬山尊者に送らんと欲得す。棄は書を持って速やかに去け。

雲岳は師の処分を奉じて書を持って薬山に到れり。道吾相い接引して和尚の処に去く。書を達し、一切了りて後薬山問う、海師兄は尋常什摩の法を説くや。对えて曰く、三句外に省し去れ。亦た曰く、六句外に会取せよ、と。師兄曰く、三千里外、且く勿交渉なるを得たることを喜ぶ。

又た問う、更に什摩の言句有りや。对えて曰く、時有つて説法し了り、大衆下堂する次いで、師、大衆を召す。大衆、首を廻らす。師曰く、是れ什摩ぞ。薬山曰く、何ぞ早く道わざる。海兄は猶お在り。汝に因りて百丈を識得せり。

・墮根 居すわる。

・生我者父母成我者朋友 列子力命篇に管仲の語とされる、生我者父母、知我者鮑叔也」という語のもじりである。

・処分 言いつけ。

師、雲岳に問う、目前の生死如何ん。对えて曰く、目前に生死無し。師曰く、二十年百丈に在りて、俗気も也た未だ除かず。岳却つて問う、某甲は則ち此くの如し。和尚は如何ん。師曰く、蔭蔭拳拳、羸羸垂垂、百醜千拙、且らく与摩に時を過ごす。

此れより師弟と共に通相に成持す。

・成持 計らつてやる。育成する。

雲岳後に一日有つて薬山を辞す。薬山問う、什摩処かに去く。对えて曰く、匠山師兄の処に去かんと欲す。師曰く、什摩事の為にするや。对えて曰く、某甲、匠山と百丈に在りし時に一願在り。什摩を願道しや。对えて曰く、某等兩人曾つて百丈にありしとき、匠

山和尚は典座と造り、某甲は侍者と造り、左右を離れずして和尚を佐副せんとす。在後、本願に違ひ、村井の事を説破せんと欲得す。師即ち許す。岳便ち下山す。道吾は衣鉢を担いて、送りて橋亭に到る。後却つて転じ来たり、和尚に不審す。和尚曰く、師兄を送り去り来たるや。对えて曰く、送り了れり。道吾却つて問う、師兄は師の左右を離る、還た得たりや。師曰く、智闇黎、何ぞ必ずしも此の問有らん。多少の年の庄膝の道伴、何事か造作せず、何事か商量せざる。更に問うを用いず。道吾云く、無いな。和尚の一言は後來の為に是れ標榜たるに堪う。和尚の一言をぞう。師曰く、若也もし此くの如ければ、我は則ち汝の与に道わん、眼は則ち有るなり、只だ濇汰を欠くのみ。道吾は此の語を聞き、当夜に便ち発し、明朝に山下の村院に到りて師兄に見うるを得たり。薬山の語を説き了りて相い共に転じて薬山に來たり、直に歿るに到るまで離れざりき。

眞覺大師拏して玄晤大師に問う、眼門より光を放ち、山河を照破し、山河大地は眼光を碍げず。此の人は過の什摩処に在りて、只だ濇汰を欠くのみなるや。玄晤大師曰く、兩人を除却し、此れを降るより已下は、任棄たい大悟し去るも也た須らく濇汰すべし。進んで曰く、此れは是れ什摩人ぞ。对えて曰く、西天は是れ一人、唐土は是れ一人。進んで曰く、西天の一人は是れ什摩人ぞ。对えて曰く、維摩居士。唐土は是れ什摩人ぞ。云く、雙林の傳大士。進んで曰く、此の兩人は什摩の時節因縁を被りて即ち濇汰せざるや。对えて曰く、泝悍なることは則ち老兄に過ぐ。

・維摩居士 傳大士 臨濟録 上堂。云、一人在孤峯頂上、無出身之路、一人在十字街頭、亦無向背。那箇在前、那箇在後。不作維摩詰、不作傳大士。珍重。」

・泝悍 ぶしつつけなことをする。祖庭事苑七に考証がある。また雜抄に、世上略有十種劄室之事」といふ章がある。

此は是れ竜花の拏なり。若し祖堂の拏に依らば、

・これは割注である。「此」といふのは、「道吾和尚四十六方始出家」以下を指すであらう。「竜花」といふのは音靈照（卷十一に伝あり）のことである。東国出身である。その人のもたらした資料を挿入したわけである。「祖堂」といふのが編纂者を指すことは言つまでもな

い。挿入部分に対応させているのは次の一則のみと思われる。

雲岳不安の時、道吾問う、この穀漏子を離却して、什摩の処に向いてか再び相見することを得ん。岳曰く、不生不滅の処に相見せん。吾曰く、何ぞ壁わざる、不生不滅の処にも亦た相見することを求めず、と。

師は、雲岳に問う、馬に角有り、棄は還た見るや。対えて曰く、有り、見んと要して什摩をか作す。師曰く、与摩なれば則ち好馬なり。対えて曰く、若し是れ好馬ならば則ち将き出だし去れ。

師、一日有つて看経する次いで、白顔問う、和尚、看経することを休得めよ。人を攤するを用いざれ、得たりや。師は経を巻却して白顔に問う、日勢は何以ん。対えて曰く、正しく午時に当れり。師曰く、猶お紋綵の在る有り。対えて曰く、無きことも亦た無し。師曰く、棄は大搬はなだ聡明なり。却つて師に問う、某甲は此くの如し、和尚は如何ん。師曰く、蔭蔭拳拳、羸羸垂垂、百醜千拙、且らく与摩に時を過しす。

- ・ 後出するよつに、薬山和尚は日頃看経することを許さなかつた。
- ・ 不用攤人得也 攤の字が未詳。伝灯録七柏巖章では和尚莫慥人好」となっている。
- ・ 猶有紋綵在 それと見て取れるしるしがまだ振つきれずに残っている。
- ・ 無亦無 伝灯録は「某甲無亦無」。

茗溪和尚、師にたいして説話して去る。後に師は雲岳に向つて曰く、茗溪は向上曾つて節察と為り来たる。岳却つて問う、和尚は向上曾つて什摩と為りしや。師曰く、蔭蔭拳拳、羸羸垂垂、百醜千拙、且らく与摩に時を過せり。岳礼拝して出で去り、道吾に向つ

て因縁を拈起せり。吾曰く、好話なるも只だ一問を欠く。岳云く、作麼生か問わん。道吾云く、何が故に此くの如きや。岳纒かにこの問頭を得るや、便ち和尚の処に去きて、前問を續ぐ、何が故に此くの如きや。師曰く、書卷は曾つて展べず。後に人有つて石霜に拳似す。石霜曰く、曾つて他の書卷を展べず。

又の時に侍者、和尚の薬食を喫せんことを請えり。師曰く、喫せず。進んで曰く、什摩と為してか喫せざる。師曰く、他を消し得ず。進んで曰く、什摩人か消し得る。師曰く、優婆夷を犯さざる者。進んで曰く、和尚は什摩と為てか他を消し得ざる。師は綿卷子を拈起して曰く、這个を争奈何んせん。

・綿卷子 未詳。

雲岳、師の浴せんことを請う。師曰く、我は浴せず。進んで曰く、什摩と為てか浴せざる。師曰く、無垢。進んで曰く、無垢ならば却つて須らく浴すべし。師曰く、這の蒼生、無垢にして什摩をか浴せん。岳曰く、如許ばかり多き孔竅を争那何んせん。

師、東国の僧を勸す。汝は年は多少ぞ。对えて曰く、七十八。師曰く、可に年七十八なりや。对えて曰く、是なり。師便ち之を打つ。

後に人有つて拈じて曹山に問う、作麼生か祇対すれば薬山の之を打つを免れ得ん。曹山曰く、正に天子の勅を銜みて、諸候は路傍に避く。進んで曰く、只だ上座の如きは、過は什摩の処にか在る。曹山云く、前鏘は托すること猶お浅きも、後箭は人を射ること深し。

・正衛天子勅云 伝灯録十七曹山章では、正勅已行、諸候避道」となっている。

・前鏘托猶浅 伝灯録は、前箭猶似可」とする。

問う、学人帰郷し去らんと擬欲する時如何ん。師曰く、人有つて遍身童爛して荊棘の中に臥す、闇黎は作麼生か帰らん。對えて曰く、与摩ならば則ち某甲は却つて歸り去らざらん。師曰く、無なり。却つて須らく帰郷し去るべし。棄若し帰郷し去るならば、我は棄に休糧の方を与えん。進んで曰く、和尚の休糧の法を請う。師曰く、二時に鉢盂を把つて上堂するに、一粒の米をも咬破すること莫れ。

曜日頗すらく、遍身童爛更に何人ぞ、棘の森森たるに臥して一智眞なり。為に報ず棄は来たりて須らく妙を体すべし、時中宛然として新たならんと擬せず。

・更 更是に同じ。下に来る疑問や否定の語気を強める。いつたい。敦煌本六祖壇經48段 数年中、更修何道。汝今悲泣、更憂阿誰。  
・時中 一切時中。

石室高沙弥、京城に往きて受戒せんとし、恰も朗州に到りて經過する次いで、薬山の路上に近く、忽ち一个の老人を見たり。沙弥問う、老人万福。老人曰く、法公万福。沙弥問う、前程は如何ん。老人曰く、法公何ぞ忙しきを用いん。這裏に肉身の菩薩の世に出づる有り、兼ねて是れ羅漢僧の院主と造る。何ぞ妨げん山に上りて礼拝することを。

沙弥は纔かに个の消息を得るや、便ち薬山に到り、衣服を換えて直に法堂に上り、和尚に礼拝せり。師曰く、什摩処より来たるや。對えて曰く、南嶽より来たれり。師曰く、什摩処に去くや。對えて曰く、江陵に受戒し去る。師曰く、受戒して什摩をか図る。對えて曰く、生死を免れんと図る。大師曰く、一人の受戒せずして而も生死を遠ざかる有り、阿棄は還た知るや。對えて曰く、既若し此くの如ければ、佛の世に在りて二百五十條の戒を制せしは又た奚をか為さん。師曰く、咄、這の饒舌の沙弥、猶お唇齒を掛著す。師便ち伊をして衆に参じ去らしめたり。

其の沙弥の庫頭に去きて主事に相看する次いで、道吾来たりて和尚に不審す。和尚は道吾に向つて曰く、棄は適來の跛脚の沙弥を

見しや。對えて曰く、見たり。師曰く、此の沙弥は嫡子の氣息有り。吾曰く、村裏の男女、什摩の氣息か有らん。未だ草草なることを得ず、更に須らく勘過して始めて得ん。師は侍者をして其の沙弥を喚ばしめたり。沙弥便ち上来す。師曰く、聞説きくならく長安は甚だ大いに聞し、と。汝は還た知るや。對えて曰く、知らず。我が国は甚だ安清なり。師曰く、汝は看經より得たるや、人の請益より得たるや。對えて曰く、看經より得ず、亦た人の請益より得ず。師曰く、大いに人有つて看經よりせず、亦た人の請益よりせず。什摩と為てか得ざる。對えて曰く、他無しとは道わず、自らはれ肯えて承當せざるのみ。師、道吾に向つて曰く、信道しんせざるや、老僧は虚しく発言せざりしことを。便ち床を下りて背を撫して云く、眞の獅子兒。

沙弥又た辞す。師問う、汝は什摩処に向かつてか去く。對えて曰く、住庵し去る。師曰く、生死は事大なり、汝は何ぞ受戒せざる。對えて曰く、彼此は是れ一般の事なりと知る、什摩をか喚んで受戒と作さん。師曰く、若し与摩ならば、我が身边に在れ、時に復た見んと要す。此れに因りて薬山より半里を去る地に在つて、庵を卓てて一生を過せり。呼んで石室高沙弥と為す。

・ 纒　　ゝしたとたん、ゝするや否や。

・ 猶掛著唇齒在　　在は句末の強辞。

・ 氣息　　意気込み。

・ 勘過　　吟味を加える。

・ 聞説　　耳にする。説は接尾語。

・ 信道　　信じる。道は意味のない接尾語。

僧問う、身命切急の処如何ん。師曰く、雜糧を種うることに莫れ。進んで曰く、何を將つてか供養せん。師曰く、無口の者。

師垂語して曰く、是れ棄諸人、保任することを知らんと欲すれば、高山頂上に向いて立ち、深深海底に向いて行き、此の処に行いて異ならざれば、方めて小許嫡子の相応の分有らん。

人有り拈じて順徳に問う、古人言つ有り、高高山頂に向いて立ち、深深海底に向いて行く、と。如何なるか是れ高高山頂に立つ。徳云く、只だ峭峭なるに処るのみ。如何なるか是れ深深海底に行く。徳云く、深湛に履踐す。

師看経する次いで、僧問う、和尚は尋常看経することを許さざるに、什摩と為てか却つて自ら看経する。師曰く、我は眼を遮せんと要するのみ。進んで曰く、学人も和尚に学んで看経せん。得たりや。師曰く、汝若し我に学んで看経せば、牛皮も也た須らく穿過すべし。

師が経を読んでいたおり、僧が問う、和尚は曰ころから、経を読むことを禁じておられるのに、なぜ御自分が経をお読みになるのです。師が云う、わしは目の相手をさせておるのだよ。進んで云う、私も和尚にならつて経を読んでよいでしょうか。師が云う、君がもしわしにならつて経を読んだら、きつと牛の革さえ穴があくだろう。

・不許 看経 一字不明の字があるように見える。この則については入矢義高『空花集』一五一頁以下参照。

長慶拈じて僧に問う、古人は眼を遮せり。眼に何の過有りや。対する者は一に非ざるも師の旨には称わず。自ら代つて曰く、一翳又た作麼生。

・一翳 金屑雖貴、落眼成翳という成句がある。

師は大和八年甲寅の歳十一月六日、衆に告げて曰く、法堂倒る、法堂倒る、と。衆人は測らずして遂に物を把つて之を燭えたり。師は拍手大笑して曰く、汝は我が意を会せず、と。師遂に寂を告げたり。春秋八十四、僧夏六十五。弘道大師化城の塔と勅諡す。

## 祖堂集卷第四

